戦争体験記

岡　定次郎（夏見台・80歳）

私は幸か不幸か甲種合格で、予備役の身で、赤紙を待っている毎日だった。

昭和十三年年秋、まさかと思っていた召集令状が、私ではなく五つ年上の、三十五歳の兄に来た。兄は野口戦闘機部隊で広東上陸に参加、次の年ノモンハン事件で、北支に転戦していた。

太平洋戦争も始まり、時世と言うか、少しでも国のためになれたらと考え、警視庁に奉職した。悪く言えば徴用のがれである。

警察学校卒業まぎわに、二日間の実務見習に菊屋橋署に派遣された。一七年四月十八日のことであった。署長の朝の訓授で、時局の重大さを教えられ、通りの交番に組長につれられて勤務についた。

正午頃立番していた時、上野の山の上空を大きな飛行機が南に向って行くのを見て、通行人等が騒いでいる時、空襲警報のサイレンが鳴った。敵のB29が都心に入るまで、日本の警戒網は、これを探知することが出来なかったらしい。これが私の戦争を身近に感じた第一号であった。

その五月に卒業し本所の言問警察署に配属、以後度々空襲にあった。非番でも空襲警報が出ると、署に参集するのだが、後では一晩に三回もある日が続くようになり、私は江戸川区小岩に住んでいて、夜は自転車で本所まで参集するが、途中で解除になり、電話連絡をして引返し、帰って寝ると又警報と言うことが幾度もあった。

そんなことで皆んなの疲労がはげしいというので、何日頃からか二晩署に泊り、一晩は自宅で待機（自署管内に被害があった時のみ参集）となった。

小梅派出所が勤務場所でしたが、敵機は都心をねらっているのか、西南方向から来て、浅草の上を通って北に抜ける。馴れというか警報が出ると、住民に知らせたり、灯火管制を見回ったりして、自分では防空壕に入らなかった。

一万米以上の高空だと、高射砲は撃たないので、探照燈の光の中をゆうゆう飛んでくる。前の塀等で焦点を合わせて、少しでもはずれれば、まずは交番附近は安心とみている。暗い家の中に居ても心細いといって、交番の回りに集まって来る人もいる。

忘れもしない二十年の元旦だった。大晦日は派出所で当番勤務についていた。午後九時頃警報が出る。今年最後の挨拶か、等いって準備をしていると、南の空から探照燈の光におくられて、B29が一機来る。いつもより左により、私に向かってくる「小梅があぶないぞ」と叫んでいると、蔵前あたりで火の粉が散る（焼夷弾は途中で爆発し火の粉と共に落ちてくる）次はと頭上を見ていた。五、六百米先に落して去った。向島二丁目に落ち

たのだが、火はすぐ消し止めた。

蔵前、菊屋橋方面はまだ燃えていた。午前〇時すぎたころ、第二の定期便が来た。あまり予想通りに来るので、そんな呼方をしていた。そんなら何故日本機が迎撃しないのかと思っていたが、一万米以上だと高射砲がとどかず、戦闘機も、そこまで昇って、戦う余裕がないのだと。

例の如く探照燈の光にのって来るが、あまりにも先刻のコースと同じだ、皆なを退避させて見つめていると蔵前上空で火の粉を見た時、B29は私の頭上、「ピカー」と光った。無意識のうちに、五、六人入っている防空壕の中に、頭からサーと、のめり込んだ。間一髪ドドドド。(直撃では駄目な壕だが)

焼夷弾は交番前の交差点を中心に落ちた。弾は直径十センチ、長さ五〇センチ位なのが、三十六本束になっており、これが上空で爆発し、広範囲に落ちてくる。着地すると、筒から腐った肉切様のものが、「ピュー」と二、三〇米とび出す。するとその肉切様のものが火の紐様になる。交差点と五、六軒の民家にも落ちたが、大きくならないうちに消止めた。明方又同じコースを一機来たが、芝区の方に落としたとかですぎ去った。キモを冷やした元旦でした。

二十年になると空襲も激しくなり、編隊で高度も低く、昼夜も問わなくなった。隅田公園対岸に高射砲陣地があり、応戦していた。他にも陣地があったのだろう。すごい音だ。夜襲の時等は花火を見ているようだったが、なかなか命中しなかった。現在の技術とは違うのだろう。

三月九日は本署にいた。夕方の空襲で小梅一丁目がやられ、大勢で出動して消火した。B29は低空を飛んでいるので、頭上近くになると恐怖をおぼえた。B29はずい分大きい。

署に引上げていると、何故か北西の風が強くなってきた。次の警報が出た時、一度消した小梅が又燃え出したというので、同僚三人と、その警戒と応援のため、本隊と別れて派遣された。消防車も二台おったが火勢が強く、だんだん牛島神社方面に撤去をよぎなくさせられていた頃、空襲が始まったのだろう、至るところから煙が来るようになった。

へんなもので、あんなに大きく見えると恐ろしく感じたB29も、煙の中にいると頭の上に来たようでも、音だけでは恐くない。

消防車も都電通りまで引き態勢を立直して、都電通りから二本目の道路で火災を喰い止めようと一生懸命にやっている時、橋のほうから人波が押し寄せる。浅草方面も火災が起り、荷物を積んだ自動車、荷車、リヤカー、それに荷を背負った人で一ぱいの言問橋上にも火がついたのだとのこと、火のついた布団等が風で、公園の木の上を飛んで、牛島神社の社にまで来た。

小梅の方は西風だったので道路で食い止めたが、電車通りは荷を持った人で一ぱい。こんな所に火が来ても大変だと思った。

言問橋上には、一燃えしたあとまた浅草方面から避難者が来はじめた。火の中を焼死体を押し分け踏越えて来たのだと、来るなり道端の防火用水にとびこんでふうふう言ってる者もいる。浅草方面から見ると隅田公園の樹木は神様のように見えたとも言っていた。

何人も来たが、皆んなヤケドをしているので、小梅小学校に連れて行った。何故か軍隊の救護班が出来ており、手当てをしてくれた。(知らぬ間に言問警察も学校に移っていた)火は西北の風にあおられたのだから、浅草方面で隅田川べりに押しつけられた民衆は、橋を渡るか川に入るしか手がなかったのだろう。

この光景はとても、私の筆では表現できないが次の日、言問橋中程から浅草側たもと附近で、焼死体二千位と報告されていたから、如何に悲惨であったかが、うかがわれると思う。

夜明けに本部に伝令を命せられた。錦糸町駅の南方にある毛利小学校が、警視庁第七方面本部になっていた。自転車で押上に出てあの広い道を錦糸町駅に向った、まだ至る所で延焼中で、強い風が火の粉を運んで来る中を本部を探しあてた。

「言問署伝令」ととび込むと、三人いた本部員の中に、警察学校当時、家族のことで特に世話になった、学級担当の清水助教さんがいるではないか（本部員になっている）どんなことを報告したか忘れたが、「元気でやってるか」と手を出された時、めめしいが、手にすがって泣いてしまった。婦人も竹槍訓練をやろうという時だ。住民も警察官も、兵隊も生死は紙一重、その先頭に立っているのだと思っても、涙がとまらんで困った。

その時洲崎署の伝令がのめり込んで来た。よほど疲れているらしく、起きられない「全滅です。全滅です」とだけ。本部員がかけよりて、助け起こして「しっかりしろ、全滅だってお前が現に生きているじゃないか」と。

そんなやりとりを後に帰路についた。相当の被害は予想されるが、管内か、本署か転員のことか、全滅の意味を考えながら。

夜は明け切っていた。こんどは向かい風が強く、洲崎署の伝令を思いながら、時々自転車を降りて歩いた。まだ逃げ迷っている者もいて、どこが安全と聞かれるので、隅田公園は焼けないし、風上に行け、と教えると私について来るが、強い煙の風が来るとみんな風下の方に行ってしまう。

前夜はひどかったか道路端に死体がポツポツある。煙に巻かれたのか着物はそんなに燃えていない。そんな死体の下で泣いている子供を見付けたのも、その時だった（一才位）

軍隊の応援もあって焼死体の処置は順調に進んだ由、二、三日すると水上署と警防団員が水死体を舟着場（隅田公園南端の土手下にある）にあげはじめた。公園の広場に運んだが、死体の山が出来た。広場に埋めることになり、名の不明なのは一穴三十体づつ、名のわかるものは二段に重ねて埋め（埋めた上に名札）るのだ。穴を掘ったり、他に手伝ってくれた人夫は、小菅刑務所の勤労隊であった。母と子が帯等でつながっているもの、おんぶしているもの等幾十組もあり、これを埋てくれる彼等の目にも涙があった。

一カ月も過ぎるとこれが又大変。水上署であげていくのは一日五、六体なのだが、夕方署員で手のあいている者が出かけて処置するのだが、死体は男も女も腹がパンパンにふくれ、手足の出ている所はさわると、肉の下に骨が見える、タンカにのせる時、やり方が悪いと吐しゃ物が出る。くさいのは馴れた頃だが、この臭気はひどかった。こんな作業をやっている時、署長が来たことがあった。内務省出の若い署長であったが「オンボヤでも、こんなことはやらないだろうに」と目頭をおさえていた。

五月になって言問署が開散、芝区の三田署に配転、署長に「当署は無きずだ」と、言われたが、二五日、二九日夜の空襲で管内の大半がやられてしまった。そして六月召集令状がきた。

今日来て明日出発と、忙しい出征だった。三人の子供を妻に託し隣人一人に送られて、世田ケ谷の野砲に入隊即日、静岡県富士の裾野の板妻廠舎に入り、訓練中終戦になった。内地にいたので警察の勤務より、兵隊の方がらくだったと言うのが私の実感です。